

2023 年度第 4 回支部集会【関西支部】

2024 年 3 月 16 日(土)12:30-17:30(受付開始 12:00)

Zoomによるオンライン開催

主催:公益社団法人日本語教育学会

参加費:500 円 (マイページ事前参加登録にてお支払いください) 定員:100 名

※ご参加予定の方は、[学会ウェブサイトのマイページ](#) から 3 月 8 日(金)までに事前参加登録(支払含む)をお済ませください。事前参加登録について詳しくは[こちら](#)をごらんください。

※事前参加登録をお済ませになるとマイページより予稿集をダウンロードできます。また、事前参加登録者には、開催 1 週間前よりメールにて当日の詳しい参加方法と、ポスター発表資料等を別途ご案内いたします。

◆支部集会日程◆

12:00	受付開始
12:30-12:35	開会のごあいさつ
12:35-14:00	口頭発表(4 件)
14:05-15:35	交流ひろば(1 件)
15:45-17:25	講演・パネルディスカッション 「日本語教員の実践研修の課題と今後に向けての提案」
17:25-17:30	閉会のごあいさつ

【12:35-14:00】口頭発表(4 件)

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム pp.3-4、詳細はマイページよりダウンロードできる予稿集原稿をご覧ください。オンライン開催では 1 週間前からご案内するビデオを各自で事前にご覧いただき、当日の Zoom では発表者と質疑応答をいたします。

- ① 12:35-12:55「日本語学校における事務職員の業務実態に関する基礎調査
—「日本語教育機関業務リスト」の作成と、アンケートを通して—」
加藤林太郎(神田外語大学)、尾沼玄也(拓殖大学)
- ② 12:55-13:15「日本語の作文指導における文体の統一と混用について
—学習者のより豊かな作文表現力の向上を目指して—」
住田哲郎(京都精華大学)、加藤伸彦(京都外国語大学)、津坂朋宏(東京福祉大学)、黄慧(東京外国語大学)、劉淼(上智大学)
- ③ 13:20-13:40「大学に在籍する中国人留学生における日本語を使用した交流に関する実態調査—日本語母語話者との交流についての困難さに着目して—」
大池森(立命館大学)、玉尾章代(同)、玉尾文代(同)、久次優子(同)、道上史絵(同)



- ④ 13:40-14:00「ピア・レスポンスにおける読み手同士の相互行為
—読み手の参与役割に着目して—」
田中信之(富山大学)

【14:05-15:35】 交流ひろば

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。「交流ひろば」への出展は、学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

- ① 「〈実践報告〉EPA 看護師合格後における教育研修の試み—コミュニケーション実習の改善に向けて—」
伊藤美保(藤田医科大学)
外国人看護師向けのプログラム開発を行っています。EPA 看護師と日本人看護師が参加するコミュニケーション研修を EPA 教育ご担当と共に作成しました。試行した状況をお伝えし、看護師国家試験合格後の育成・研修のあり方について多くの視点で意見交換を行いたいと考えています。ご関心をお持ちの方は、ぜひお越しください。

【15:45-17:25】 講演・パネルディスカッション

「日本語教員の実践研修の課題と今後に向けての提案」

開催趣旨

「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」が令和6年4月1日から施行されます。これを受け、認定日本語教育機関で教育を行うためには、日本語教員試験に合格し、登録実践研修機関が実施する実践研修を修了することが必要になりました。日本語教育の質を高めるため、実践力を身につけた教員を養成することが今後ますます求められます。本パネルディスカッションでは、日本語教員養成特に実習に焦点を当て、現在現場が抱える課題を共有し、新制度開始後の実習のあり方について意見を出し合いたいと思います。

講師及び題目

増田 麻美子氏(文化庁国語課)
「登録実践研修機関の登録について」

パネリスト

中山 健一氏(茨城キリスト教大学)
土屋 理恵氏(清風情報工科学院)
戸川 朝子氏(南大阪国際語学学校)

◆問合先◆公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL:03-3262-4291 FAX:03-5216-7552 E-mail: shibu@nkg.or.jp



〔2023年度第 4 回支部集会（オンライン開催 2024. 3. 16）口頭発表①〕

日本語学校における事務職員の業務実態に関する基礎調査

—「日本語教育機関業務リスト」の作成と、アンケートを通して—

加藤林太郎・尾沼玄也

日本語教育機関の事務職員は、機関に不可欠な存在だが、その専門性や資質・能力等は明示されておらず、専門職として確立されていない。本研究では、事務職員の業務実態と、専門性、備えるべき資質・能力を考察する。まず 6 分類 106 項目からなる「日本語教育機関業務リスト」を作成し、それを基にしたアンケートについて 20 校 21 名から回答を得た。その結果を検討すると、分類「運営」「学生管理」「事務・庶務」では主導的関わりが大きく、特に「運営・経営」「情報収集・情報発信」「来日前新入生対応」「公的機関対応」「機関内外の規則」「在校生健康管理」「取次業務」「書類発行」「金銭」「施設・備品等」に専門性が示された。また分類「人事」については評価に適わる職員は半数以下であった。分類「教務」は大半が担当しないものの、卒業生の指導や記録は主導的に行っていた。これらは職員の備えるべき専門性の傾向を示すものである。

(加藤—神田外語大学, 尾沼—拓殖大学)

〔2023年度第 4 回支部集会（オンライン開催 2024. 3. 16）口頭発表②〕

日本語の作文指導における文体の統一と混用について

—学習者のより豊かな作文表現力の向上を目指して—

住田哲郎・加藤伸彦・津坂朋宏・黄慧・劉森

本研究では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」の作文データをもとに文体の統一に関する諸問題について考察し、作文指導の参考になり得る留意点を提示するとともに、日本語の習熟度に応じて異なる指導が必要であることを主張する。

従来、日本語の作文教育においては文章を丁寧体（です・ます体）、或いは普通体（だ・である体）に文体を統一させる指導が行われることが多かったが、その指導の妥当性および文体の統一に関する学習者の誤用についてはこれまでのところ十分な分析は行われていない。

そこで本研究では、I-JAS の作文データ（エッセイ）から母語別・レベル別にどのような誤用の傾向があるか詳細に検討し、その結果を踏まえて作文指導の際にどのような点に留意して指導すべきか、また文体統一—辺倒の指導だけではなく、習熟度別に指導方針を変え、上級レベル以上の学習者には両文体の混用を含め適切に使用できるようになるための指導のあり方について議論を行う。

(住田—京都精華大学, 加藤—京都外国語大学, 津坂—東京福祉大学,
黄—東京外国語大学, 劉—上智大学)



〔2023年度第 4 回支部集会（オンライン開催 2024. 3. 16）口頭発表③〕

大学に在籍する中国人留学生における日本語を使用した交流に関する実態調査

～日本語母語話者との交流についての困難さに着目して～

大池森・玉尾章代・玉尾文代・久次優子・道上史絵

発表者らは、勤務する大学の一キャンパスにおける留学生の日本人との交流状況を明らかにするため、アンケートとインタビューによる実態調査を行った。まずアンケートの結果から、交流への希望に反しその機会が得られていないこと、さらに中国人留学生がより交流の機会が得られていないことが明らかとなった。続いてアンケートの結果を踏まえて中国人留学生に焦点を当て、インタビューを行った。

その結果から、彼らは社会通念上必要な配慮の難しさ、文化的差異により生じた不理解に直面することで、異質感、疎外感を感じていることが示された。その背景には、留学生が規範的な「日本語」を越え、いかに構築主義的にかかわる場を得るのかという課題、さらに日本語教育自身も彼らがそのような場へと進んでいくことをいかに促すのかという課題があると考えられる。

（大池一立命館大学，玉尾（章）一立命館大学，玉尾（文）一立命館大学，
久次一立命館大学，道上一立命館大学）

〔2023年度第 4 回支部集会（オンライン開催 2024. 3. 16）口頭発表④〕

ピア・レスポンスにおける読み手同士の相互行為

—読み手の参与役割に着目して—

田中信之

本研究の目的はピア・レスポンス (PR) 時の読み手同士の相互行為の特徴を明らかにすることである。Goffman (1981) にもとづく、PR の参与枠組みは読み手 (話し手 speaker) が書き手 (聞き手 addressee) に質問や問題点指摘をして、書き手がそれに回答することが核となり、そこに他の読み手 (傍参与者 side participant) が加わる形となる。本研究では留学生 11 名を対象に PR を実施し、読み手の参与役割に着目して相互行為を分析した。結果、読み手同士の相互行為は(1)読み手の一人が書き手に発話した内容に対し、もう一人の読み手が発話する(2)読み手の一人が書き手に代わって、もう一人の読み手に発話する(3)読み手と、もう一人の読み手が協調し、書き手に対して発話するという3つに分類された。さらに、読み手同士の相互行為は議論の活性化や場の雰囲気づくりなどに影響していることが示唆された。

(田中一富山大学)

